

井上靖記念文化財団

が さい浜を隔てて堤防が築かれてあり、 父が生きた年齢まで、 の言をよしとした。三十分程の訪問を打きって、 った。村長の父なる人物が何歳まで生きたか知らなかったが、私はそ 拡がっていた。 私もまた生きたいと思いますね。 堤防の向うには春の荒れた海面 村役場を出ると、小 そう村長は言

人類ももうこうなってはいかんですよ。 自滅しますよ、 やがて。 潮に

私はこの素朴な預言者の言をも亦よしとした。 やけた肌とさざえのような掌を持った漁師の老人は言った。 の切り岸に立って、真赤にただれた夕焼けの空を見ている時であった。 宿の裏手

鼓でも叩いているように聞えた。 私はこの海辺の村で三夜を過した。夜半眼覚めると、 い音であった。どんどんとも、また聞き方によっては、 いささかの暗さもない華やいだ明る 海鳴りの音が太 ろんろんとも

聞えた。

(『運河』より)



海鳴り (詩) 井上靖………2

ご挨拶 井上修一……6

井上靖先生を憶う 松田忠男………8

秋風に吹かれて

坂口總子 ......12

い鳩のおしらせ………… 15

井上靖の書斎に 黒田佳子……16

図書だより………21

父の休息 家族の撮った写真から 6 井上卓也 ……… 24

私の備忘録より 浦城いくよ ………28

平成二十三年度 事業報告 井上修一………42

花のカット 鳩のカット 福井欧夏

黒田佳子

す黒田秀彦氏には、 した。ここに記して謝意の一端を表させていただきます。 わらぬご指導のほどをお願い申し上げます。また、新財団で事務局長をお願いしておりま い間のご協力に心より感謝申し上げますとともに、 完了の運びとなりました。 の間、皆様からはさまざまなご支援、ご協力をいただきまして誠に有り難うございました。 平成二十三年度末まで旧財団でお世話になりました理事・評議員・監事の方々には、長 懸案でありました一般財団法人への移行も、平成二十四年四月一日の登記をもちまして 井上靖記念文化財団を設立いたしまして早くも、 お忙しい中を移行手続のすべてをお任せして大変ご苦労をお掛けしま 気持を新たにして新財団の運営に取り組む所存でございます。 二十一年が過ぎようとしています。 新財団にお残りくださった方々には変

また十五回を持ちまして一区切りを付けました井上靖文化賞は、 新財団におきましても

のさらなるお知恵を拝借させていただきたく存じます。 中心事業として再開する方向で検討しておりますが、まだ実現に至っておりません。

敷は旭川市立井上靖記念館に移築され、平成二十四年、井上靖の誕生日である五月六日に 皆様に衷心より御礼申し上げます。 誕の地で再び生気を取り戻したようで清々しく、 一般公開が始まりました。旭川の広々とした緑の空間に移された書斎や応接間は、父の生 平成二十三年度は、 世田谷区桜三丁目の井上靖邸の解体と移築の年でもありました。 大変うれしく思っております。 旭川市の

般財団に移行しました本財団を、 今後ともどうぞよろしくお願いいたします。

平成二十四年十月吉日

# 井上靖先生を憶う

# 松田忠男(井上靖ナナカマドの会会長/剛旭川しんきん地域振興基金理事長)

立、旭川市に寄贈した。
平成二年、旭川が生んだ偉大な作家井上靖の文学碑を建念して、旭川が生んだ偉大な作家井上靖の文学碑を建

い。

立学碑建立の状況については、本誌第四号で紹介されているが、本号では、井上先生との出会いや、井上れているが、本号では、井上先生との出会いや、井上

誌をお願いに、世田谷のご自宅に伺った。進めるなかで、その具体的な打ち合わせや、碑文の作二十五年ほど前になるが、先生の文学碑建立計画を

に止まらず、さまざまな分野にわたって熱く語られた。口調で、しかし『孔子』著作の苦労話など、文学のみ実際にお会いしてみると、先生は、極めて穏やかな

し出た。

と出た。

と出た。

と出た。

との後、先生から、碑文作成にあたって、設立者と

との後、先生から、碑文作成にあたって、設立者と

思わず長居するほど、楽しい話題が尽きなかった。

○旭川市が明治二十三年に旭川村として開村してから

○「――すっぽりと雪をかぶった旭川の町も美しかっの「――すっぽりと雪をかぶった旭川の町も美しかった。

ナナカマドの 雪をかぶった 赤い実のランプよ

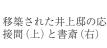
「ナナカマドの赤い実の洋燈(ランプ)」直筆原稿

に広く親しまれていること 昭和五十五年、『三田評論』に掲載された、この先 生の自然のもつ繊細な美や、力強さがいきいきと表 さらに、ナナカマドは、「旭川の木」として、市民 である。 である。 である。 に、強く感銘をうけたこと

先生には、この不躾な申し出にもかかわらず、快くその趣意をお汲みとりいただいたが、これも、「――いつ、どこで生まれたか? 幼少の頃こういう質問をいつ、どこで生まれたか? 幼少の頃こういう質問をれた。こう答えて、多少の誇りに似た思いを持った。ー」と、先生は自伝的小説『幼き日のこと』に書きつづられているように、一年足らずで旭川を去ったとはいえ、生まれ故郷への熱い想いからのご快諾だったといえ、生まれ故郷への熱い想いからのご快諾だったといえ、生まれ故郷への熱い想いからのご快諾だったといえ、生まれ故郷への熱い想いからのご快諾だったといえ、生まれ故郷への熱い想いからのご快諾だったといえ、生まれ故郷への熱い想いからのご快諾だったと

の詩文は、先生が望まれたアフリカ産の黒御影石の碑マドの赤い実の洋燈」が書き上げられた(上図)。こまた、開基一○○年に相応しい、壮麗な詩文「ナナカこうして、旭川の街を表現する象徴的な詩として、







れた。 に、先生の自筆により刻さ

ら詩文を朗読され、「生ま 式では、凛としたお声で自 店前)に来旭された。除幕 条通八丁目、旭川信用金庫本 しみじみ語られた。 は本当に幸せなこと」と、 れ故郷に自分の碑が建つの 文学碑の除幕式(旭川市四 様やご家族とごいっしょに、 平成二年九月、 先生は奥

る旭川信金主催の講演会、 同日、一〇〇〇人を超え

柄に触れ、 に出席され、多くの市民が先生の優しく、 翌日の五〇〇〇人が集う市の開基一〇〇年の記念式典 深い感動を受けたのだった。 大きなお人

井上靖記念館」の建設構想が進んでいたが、残念な この時、先生と当時の坂東旭川市長との懇談で、

館を目にすることなく、 ことに、先生はその四か月後の翌三年一月、この記念 他界されてしまわれた。

「井上靖ナナカマドの会」が発足した。 い想いを永遠に残そう」との多くの人たちの思いから、 その後、平成四年九月に、「先生の故郷に寄せる熱

○「井上靖 めているが、 以後、ナナカマドの会は、井上文学の普及活動に努 展などの企画展 人と文学」展、「井上靖と万葉の世界」 ちなみに、本年度の主な事業をあげると、

○「夏休みおはなし会」「ロビーコンサー 普及事業 ト」などの

○「井上靖 などの読書会 短編小説を読む」「赤い実の洋燈読書会」

○会報「赤い実の洋燈」の発行 ○「井上靖講座」「文学講座」などの講座・講演会

活動を続けている。 ランティア……等々、 そのほか、 記念館内の施設案内、 井上靖記念館の協力組織として、 館内喫茶業務のボ

翌五年七月、 旭川市は、 郷土が生んだ偉大な作家井

> 偕行社・旭川郷土博物館)に並べて建設した。 徳を称えて、「井上靖記念館」を旭川彫刻美術館 上靖を多くの市民に知ってもらうとともに、先生の遺

の記念館に移設され、当時のままに再現された。 間が、ご遺族のご好意により、先生の生まれ故郷旭川 多くの名作を生み出した世田谷の井上邸の書斎と応接 さらに、平成二十四年五月、 先生が五十歳の時から

深いものである。 文化都市を標榜している旭川市にとって、 このことは、記念館の一段の充実はいうまでもなく 非常に意義

滾る情熱と、飽くなき探求心に満ちた、在りし日の 節になると、 姿が偲ばれる。 いつも雪をかぶったナナカマドの洋燈が街に灯る 先生の穏やかなお人柄の奥に秘められ た 季

## 坂 口總子(米子「アジア博物館・井上靖記念館」友の会会長)

12

に二回の『海鳴り』(井上靖友の会会報)の原稿も、頭 ある。私ごときにと、強くおことわりしたのは、当然 ったり短かったりで、編集の人を困らせている。 の中を無にして、締切前夜書く始末である。毎回長か である。 上靖記念文化財団『伝書鳩』編集室からの原稿依頼で 四百字詰原稿用紙で八枚程度とある。私は年 一通の封書が、私に届けられた。

三回分の原稿を書けば、それも『海鳴り』に書いてい 引き受けした。 るような、自然体であれば……と、ホッと安心してお 『海鳴り』はだいたい八百字くらいの原稿故、その

た会員の方々が亡くなられたり、病気だったり、また 米子の井上靖友の会も、年数を経て多くの熱心だっ

その旅ですっかり親しくなった。隠岐へ、横地会長が 話も出来なかったが、 よく似ていらして、その時はバタバタしておられ、お 長女の浦城さんですよ」と紹介された。井上靖先生に 足を向けては寝られないのである。発会時のパーティ とを抜きには、書かれない。本当に、御世話になり、 ある。『伝書鳩』に寄稿するにあたり、横地会長のこ とても元気のある会だったのにと思う、今日この頃で る。発会当時は、横地治男会長のパワーをいただき、 新しい会員に入っていただくこともなかなか困難であ 一の様子、お客様の御名前等書いていたら、きりが無 そのパーティー会場で、「あの方が井上靖先生の御 私の頭の中に大切に大切にしまっておくことに。 数ヶ月後、 御一緒する旅があり、

ご案内下さり、主人共々うかがった。

館には無い。しかし、横地会長の気持ちが強く反映し 家の洋間ソックリな記念館を作られた。私は何回か井 ているからこそ、年々風格がそなわってきている。 ん河井寛次郎の大壺も浜田庄司の大皿も、米子の記念 上邸へうかがい、あまりにソックリで驚いた。もちろ ておられた。米子のアジア博物館の奥深い所に、井上 山陰は、 井上靖先生を、横地会長は、非常に尊敬し親しくし 井上先生の奥様、御家族が疎開しておられ

むと、ありありと風景が浮かぶ。映画では、山々の峰 の景色は記憶に残っている。 が美しく、白黒映画なのに、何年か経過した今でもそ たという。さぞ山奥でご不便だったろうと思う。その 井上靖記念館が建っている。「通夜の客」を読

今日まで、務めてきたけれど、まだ疑問符のままであ 山、優秀な方々がおられるのに。先生の御指示通りに なったのか、いまだにわからない。世の中には、 何故、遠藤仁誉先生が私を会長にご指名に もし、この役目を引き受けていなければ、

> 色々マイナスの面がある。 では感謝している。 プラスの面が大きいので今

一番大きい。 井上文学を通して、色々知識を収得できたことは

して、 た充足感というか、歴史の中の人物像が、 のだ。一冊、一冊、 って、 大学を卒業しても、本を読む習慣がなかった私にと 井上靖文学との出会いは、本当に感謝すべきも その時代にあたかも私も存在しているような 読み上げていくごとに、知識を得 生き生きと

ある。 の気持、 に向う際の心理状態、 があったのだろうか。楊貴妃の心、明智光秀の本能寺 の心理、「風林火山」、チンギス・ハーンの気持、淀殿 井上靖先生の頭の中には、いったいどんなイメージ 等々。 文章の中に引きこまれていくばかりで 「化石」の主人公のガン告知後

動して、泣いた。母親が、自分を大切に思ってくれて いたことにはじめて気づき、 先日「わが母の記」の映画化があり、見に行き、感 主人公が大泣きに、 泣 く

● 「欅の木」の銘板設置

短時間だったがお目にかかった際、井上文学の素晴し と強く要望した。特に「化石」はいかがかと。 さを大宣伝して、 シーン。たまたま、プロデューサー もっともっと映画化出来ないものか が米子に来られ、

命」ということを、強く述べられている。井上先生は 遠藤先生の講義後に再読しようと思っている。「天 病室にゴザを敷き正座をなさり、 先日の読書会は「孔子」だった。むつかしいから、 あの長編を書かれた

る毎日だろう。 もし読書会がなかりせば、 テレビを見て一日を終え

語に引きつけられていった者が、勝者であると私は思 れていくかわからないが、井上靖先生の文章の一語一 向かい合っている。 読書会をし、 い緑々とした場所に、 この会は、派手なものではなく、 井上靖友の会は、 毎年、どれだけの本が出版され、ほうむら また年一回の総会は御座敷で行われる。 とても、 いかほど、その本から得ることが 大きな応接室があり、そこで、 めぐまれた会である。 個人個人が、 本と 広

っている。

ている。 旅を企画している。本によると、美しいお顔、 で参加できれば、そのことをお礼申し上げねばと思っ いお顔、いろいろ観音様がいらっしゃるようだ。元気 今秋、「星と祭」に出てくる琵琶湖の観音様巡りの やさし

もくせいの花の香りも、ただよって来る日も近い。 我が家の庭にも、 彼岸花が一面に咲いている。きん

1954 172882880728

は「大けやき」「千年欅」と称され、地域の人々や桃木」に登場したのは、この桃三小とその欅である。欅

三小の生徒・教職員に親しまれてきた。小説では主人

校庭に入って大けやきを見る

ととなり、

同窓会によって寄付が募られた。その寄付

大けやきについての二つの銘板が設置

の一部を使い、

場面が描かれている。 公が桃三小に立ち寄り、

この度桃三小の閉校に際し、

記念碑が制作されるこ

閉じ、

中野区立桃丘小学校、

中野区立仲町小学校と統

合し、現在の桃花小学校となった。

昭和四十五年、

日本経済新聞に連載された「欅の

第三小学校(以降、

桃花小学校の庭にある。ここには以前、中野区立桃園

桃三小)があったが、平成二十年

この欅は現在、平成二十年四月に開校した中野区立

三月三十一日をもって開校以来八十五年の歴史に幕を

抜粋からなる銘板が設置された。

「欅の木」で取り上げられた欅の一つに、

平成二十四年三月二十五日(日)、

井上靖の小説

された。 人公が見上げた時と同じ姿で、今も小学校の校庭に立桃三小は閉校されたが、大けやきは「欅の木」の主工藤直子氏の詩「いのち」が掲載されている。 一つには 「欅の木」の抜粋が、 もう一 つには

やきは地域の人々に愛され続けることだろう。 っている。 銘板を一つの記念として、 これからも大け

「大けやき」とその前に設置された銘板。「欅の木」 の一節が記されている。

### 黒田佳子 (井上靖·次女)

光にある井上靖記念館内に保存されることになりまし 父の家は、多くの方のご厚意により、北海道旭川市春 ここ二年ほどそのままになっていた東京世田谷区の 井上靖が亡くなって、二十二年が過ぎました。

まで全館に煌々と電気が灯り、寂しいはずの家の取り 慌ただしくなった頃、父の『わが母の記』が原田眞人 壊しも思いがけなく、 の隅々、長年空いていた子供たちの部屋や屋根裏部屋 で、映画関係の人々の出入り場所に変わりました。庭 に使われることに。それからのひと月は朝から夜ま 監督のもとで映画化されることが決まり、 移築が決定し、工事の手続きや相談で関係者が急に 賑やかな雰囲気で終えることが 家がロケ地

できました。

誕生しています。 医として陸軍に勤務していた父親の赴任先であった旭 継いできた家柄で、その長男に生まれた靖ですが、軍 井上家はもともと静岡県伊豆市湯ヶ島で代々医業を (当時石狩国上川郡旭川町第二区三条通十六ノ二) で、

然の広大さからか、今にも井上靖が生まれた明治末頃 の木造の町並にもタイムスリップしそうな、 町です。けれど関東に住み慣れた私などは北海道の自 た町でしたが、現在の旭川は洒落た建物の並ぶ明る っぽい雰囲気を感じます。 その頃の旭川は、軍隊の大きな駐屯地として知られ メルヘン 11

今年・平成二十四年・五月六日。 井上靖の誕生日

盛大に催されました。式典に参加し、東京から遠い旭 当たる日に、旭川の井上靖記念館で、 思いでした。 で以前のままの書斎と応接間を見つけた時は、 オープン式典が

色なのかと、感慨が湧いたものです。 広がっていました。縁側の籐椅子に座り、庭を見るの が好きな父でしたが、これから父が眺めるのはこの景 びもつかない旭川の明るく伸び伸びとした木々の緑が、 書斎の廊下の窓ガラスの向こうには東京の庭木など及 建物の内部は同じでも、外の環境はがらりと変わり、

静かにして」と言う母の声が耳に戻ってきます。けれ ど私の書斎の記憶の中には、旭川に移築した書斎とは お茶をお持ちして」「お父さんは書斎でお仕事中です。 た赤ん坊は、長い生涯を終えてから又この生地に戻っ 遠い昔この地で、新婚の若い両親の腕に抱かれて 書斎を思う時、私には「書斎にいらっしゃるから 安らかに過せるのだと思うと、ほっとします。 61

別に、「森前町の書斎」「滝王子の書斎」とがあります。

# 森前町の書斎(東京都品川区大井森前町)

呼び寄せ、一緒の生活を始めました。 法寺に下宿していた靖は、翌昭和二十四年十二月 聞大阪本社からの転勤で東京に移動し、家族を郷里湯 十二歳)に、品川区に家を借りて、離れていた家族を ヶ島の実家に預け、 昭和二十三年四月(靖・四十歳)勤めていた毎日新 一年間一人で葛飾区奥戸新町の妙 (回 四

した。 で、母屋から短い廊下で繋がれた小さな離れが書斎で 世話をして親戚から借りてくれた家だそうです。 前町の家の書斎」です。この家は靖の弟・森田達が 一五〇坪くらいはあったのだろうかと思う庭付きの家 私が初めて書斎として記憶しているのが、この「森 敷地

界』に、引っ越しの十二月には「闘牛」が『文學界』 らないが、とにかく作家になるぞと、井上靖が心を決 されるといった時期でした。これからどうなるか分か に、「通夜の客」が『別冊文藝春秋』十四号に、掲載 め出発した時期に当たります。 この引っ越しの二ヶ月前の十月に「猟銃」が『文學

品が映画化されたのもこの家の時でした。 芥川賞の受賞もこの家で受け、「戦国無頼」などの作 守時に恐る恐る覗いた私には、思い出深い書斎です。 時には穏やかな空気に変わる書斎が不思議で、父の留 父が居ればピリピリした空気に満ちているのに、 て創作ができる、絶好の場所だったろうと思います。 うもなく、離れ屋の書斎は、今思い出しても落ち着 四歳の私を含め、子供四人の中では作品など書けよ 留守

物語」などの作品もこの時期に生まれています。 作家の生涯」「青衣の人」「星よまたたけ」「あすなろ 「漆胡樽」「白い牙」「霧の道」「戦国無頼」「ある偽

をする下町風の土地柄でした。 櫓が組まれ、ピーシャラ、ピーシャラとお囃子の練習 祭の時などは家の前の空き地が町内の集合所になって 床屋、通り隔てたお向かいはお風呂屋、駄菓子屋など。 家の近所は、隣りは長屋風のアパート、反対隣りは

族は急いで近くに別の家を捜すことになりました。 私にとっては子供時代の思い出深い家でしたが、 家主の事情で立ち退きを頼まれ、 家 兀

# 滝王子の書斎(東京都品川区大井滝王子町)

18

子供が庭で騒ぐと、 をする父の様子が、 事をする父の姿、書斎の隣室に当たる客間で客と応対 大井に引っ越す。門から玄関までの長い導入路、細長 い敷地に合わせて設計された細長い家と庭。書斎で仕 昭和二十八年十二月(靖·四十六歳)、 庭から全部見える家で、仕事中に 友だちごと怒鳴られたものです。 同じ品川区

斎と本置きの小部屋に入りきらず、廊下にも積み上が 次々と出版される完成本が玄関に運び込まれては、書 作家の立場が堅固になった時期でした。狭いこの家に 流新聞の依頼が来るようになったと聞いています。そ させて貰えなかった頃。やっと「あした来る人」が朝 記」「射程」「白い風赤い雲」「氷壁」そして「天平の の後の「氷壁」は当時のヒット作に。これで井上靖の 日新聞に連載され、評判を得て以後、どっと中央の一 が、それでも、まだ中央の一流新聞にはなかなか連載 っていた思い出があります。この書斎で創作された作 「あすなろ物語」などで作品は認められてきました 「風林火山」「黒い潮」「姨捨」「淀どの日

甍」など。当時は車が多くなってきた時代なのに、家 とになりました。 の周囲の道が細く複雑で、増えた編集者の来訪に不便 四年ほどで東京・世田谷区に土地を求めるこ

# 世田谷の書斎(東京都世田谷区桜)

なっていました。 せるのは本当に大変だったと、暫く家人の話題の種に 時代ではなく、滝王子の家に詰まった本を引っ越しさ 越し。個人が今のような大規模の引っ越し会社を使う 昭和三十二年十二月(靖・五十歳)、世田谷に引っ

くる中学時代からの友人の磯山正氏。 新居の家の設計は、自伝小説「夏草冬濤」にも出て

ました。それでも井上靖の散歩道として、雑誌などで は林を歩く父の姿の写真などが残っています。 ようですが、数年で林は切られ住宅に変わってしまい ては仕事の合間に父が散歩でもすれば良い、と思った りは馬が放された、小さいながら牧場でした。母とし 当時家の前には馬事公苑所有の松林があり、 その隣

> なり、近所から反対運動が起こり、父も署名を求めら れていたことがありました。作品「欅の木」は、 の木が生えていますが、一時この木が切られることに くそのことと関係あってのことでしょう。 家の斜め前にはその頃の名残か、今でも太い幹の

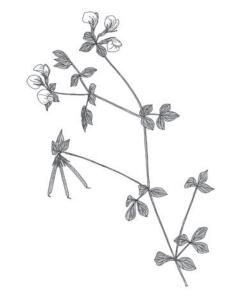
ち着いて取り組んだ作品が多くなっています。 ょうか、西域物をふくめ、歴史作品に興味を寄せ、落 世田谷に引っ越してからは、父の年齢もあってでし

狼」「しろばんば」「狼災記」「補陀落渡海記」「ローマ 母の記」「孔子」など。 王」「北の海」「四角な船」「欅の木」「星と祭」「わ 「わだつみ」「おろしや国酔夢譚」「夜の声」「額田女 の宿」「楊貴妃伝」「風濤」「夏草冬濤」「後白河院」 「海峡」「楼蘭」「敦煌」「凍れる樹」「洪水」「蒼き

書斎の大掃除を欠かさない人でした。その父が亡くな るひと月前の暮れ、 井上靖は整頓好きな人でした。日常の掃除は多忙の 家族まかせでしたが、年末はどれほど忙しくても 息をあえがせ酸素吸入器に助けら

ません。 れて、ゆっくりと書斎の掃除をしていた姿は忘れられ

要の紐を束ね、棚を拭き浄めながら、苦しそうに見え う思っていたでしょう。余計強く手伝うとは言えませ 娘の私は信じています。 んでした。けれど、ゴミとなる紙を丁寧にたたみ、不 ても、父はあの一時、充足した時間を持ったのだと、 せんでした。これが最後と家人も思ったし、本人もそ 手伝うと言っても「いいや、大丈夫」と手伝わせま



### 図書だより

二〇一一年四月以降に発表された井上靖に関係する 論文、記事をご紹介します。

#### 書籍

- ○森井道男『残照 井上靖 二〇一二年) 道彩々』(北國新聞社、
- ○綾目広治『反骨と変革 靖・昭和三十年代の新聞現代小説」「井上靖文学と い・格差』(御茶の水書房、二○一二年)→「井上 日本近代文学と女性・老

#### 【論文・記事】

○何志勇「一九六○年代における井上靖の中国関係歴

一 年) (『城西国際大学日本研究センター紀要』 六号、二〇 史小説の大衆性 大衆雑誌との関係を視座に」

○田村嘉勝「川端康成と井上靖 (『言文』 五九号、福島大学国語教育文化学会、二〇 人間そして作家」

一年)

- ○山﨑保寿「附属浜松小学校が保管する二つの石碑が 告 師範学校附属小学校」(『静岡大学教育学部研究報 物語る歴史的エピソードー 人文・社会・自然科学篇』六二号、二〇一一 -井上靖が在学した浜松
- ○角替茂二「お茶と文学者(第五十五回) サンフランシスコ万博(1)」(『茶』静岡県茶 井上靖

業会議所、二〇一一年九月)

- 0 角替茂二「お茶と文学者(第五十六回) 業会議所、 サンフランシスコ万博(2)」(『茶』 二〇一一年十月) 静岡県茶 井上靖
- 0 業会議所、二〇一一年十一月) 角替茂二「お茶と文学者 サンフランシスコ万博(3)」(『茶』静岡県茶 (第五十 七回) 井上
- 0 月 大場啓志「続・記憶に残る本 (20・最終回) 「流転」 「闘牛」井上靖」(『日本古書通信』二〇一一年十二
- ○山田哲久「井上靖「漆胡樽」論」(『国文学年次別 二〇一二年) 論文集 近代4 平成21(2009)年』朋文出版、
- ○呉楠「異国文学に対する理解とその映画化 六三号、 靖原作、田壮壮監督映画『狼災記』(邦題『ウォー 二〇一二年三月) リアー&ウルフ』)に関する考察」(『人文学報』四 首都大学東京都市教養学部人文・社会系、
- 原田眞人·役所広司 (対談)「「わが母の記」のこと、

- うこと」(『キネマ旬報』二〇一二年五月) 小津のこと、小津映画の精神で井上靖を撮る、 とい
- ○虞萍「真の「文化交流」とは何か 三号、二〇一二年八月) を通して」(『名古屋外国語大学外国語学部紀要』四 井上靖と冰心
- ○増田俊也「柔道と文学へ導いてくれた井上靖 (『新潮45』二〇一二年十一月) 北 0

第十 二〇一二年七月二〇日に発行された 一号の目次を紹介します。 『井上靖研究』

#### 論文

- ○藤澤全 融合」 「小説 『比良のシャクナゲ』 詩と物語 0
- ○小関一 彰 「井上靖と母 『わが母 の記 ( 月 0
- ○何志勇「「孔子」における観察の旅と観照の 「渡り鳥」をめぐって」 旅



н ж



○福田美鈴「近頃のことから思い出二・三」

○木村雄次

「井上靖の

「幼き日のこと」と大岡昇平の

格

「幼年」

○瀬戸口宣司 【エッセイ】

「井上靖と散文詩

詩集

北国

0) 性 0

田村嘉勝「「芥川賞」選評にみる井上と川

端

0 見

解

両者の小説のありようを垣間見る」

• • • • • •

• • • • • • • •

•

• 

•

#### 井上卓也 (井上靖·次男)

# 大井町での闘う家長の休息

(旧) 森前町での暮らしに思いが至るのは自然な事だ 二軒の家での八年間の日々、 何か書こうと机に向かうと、やはり大井町で暮らした、 父の日常の暮らしぶり、そして「父の休息」の事を 特に最初の棲家であった

荒れ狂い、吠えまくり、 ていった日々であったからだ。 それは恐らく父の人生の中で、父が最も激しく闘い、 そして成果を確実にモノにし

期までの事である。そして、父の大井町での暮らしぶ 紹介してみようと思う。 に書かなければならない、 りを知る人々が残り少なくなった今こそ、『伝書鳩』 その八年とは、僕の幼稚園時代から中学二年の二学 父のこの頃の面白い側面を

> た。僕が拙著に書いた、ちゃぶ台転覆事件、 りでなく、手がつけられない程に機嫌の悪い日もあっ 晩まで書きまくっていた父。決して機嫌のいい日ばか 広いとは言えない棲家で、四人の子供を抱えて朝から のも、この森前町の棲家での事だった。 の城南の片隅、生活のにおいに満ち満ちた大井町での まだ戦後の混乱から立ち直ったとは言えなかった都 が起った

である以上父なりの休息があった筈である。今回はこ んな〝大井町での父の休息〟を探してみたい。 しかし、こんな父の 、疾風怒濤、の日々にも、

忙しそうに見える日々でも、 たと思う。それは勿論、世田谷の日々でも言えた事な まず第一は、父と酒の時間。僕が知る限りどんなに 父は晩酌を欠かさなかっ

思っていたのは、この時代だったのではないか。 象に残っている。それは僕が子供だったせいもあるけ どうかはともかくとして、父がもっとも酒をうまいと にうまそうに飲んでいた。その一瞬が休息と言えるか た時も、家族だけの食事の時も、ビールか日本酒を実 た一瞬の、父の笑顔の残像のせいだ。編集者がいらし れど、やはり父の忙しさと、その忙しさから解放され のだが、僕には大井町での〝父と酒の時間〞の方が印

親の質問とは違っていたけれど、でもまあ、それは父 生になったのか」「キミは何という学校に行っている 眼が止まる時間は限られていたのだから。 が仕事から解放された証拠でもあったのだ。子供達に のか」という質問を何度となくした。およそ世間 そしてこんな時父は僕の顔を見ると、「キミは何年 の父

行き」と「志賀高原行き」くらいか。八年に二度。 井町時代で僕の記憶に残っているのは、二回。「日光 田谷に移ってからは、 そんなに度々あったわけではない。何年かに一度、大 あとは、「家族旅行」である。家族旅行といっても、 家族全員そろってではないが海

> 気がつかなかったけれど……。 旅行だったに違いないから、父と母のラヴラヴぶりに 旅行だ。それはそれはいろいろなものを乗り越えての 行ではまだ父と母がラヴラヴだったというのだ。でも 父が自分の父親でいてくれた事だ。もっとも三歳年上 そんなことは当時の僕には全然分からない。何が楽し 間一般の家族旅行と比べたら大名旅行だったと思うが、 でに父には相当な原稿料が入っていて、その頃の世 ではあるが、くっきりと憶い出される。今思うと、す から僕がハンカチを飛ばしてしまった事とかが断片的 姉がボートから落ちた事とか、東武ロマンスカーの窓 時間の経過とは逆に鮮明に憶えている。中禅寺湖畔で 特に「日光行き」は僕がまだほんとに子供だったのに、 外への二度も含めて何回かあったけれ もうなづけるものがある。残念ながら幼い僕は、 しかし考えてみれば、この旅行は戦後はじめての家族 の兄にはもっと大切なことが記憶されている。この旅 かったと言えば、父の機嫌が旅行の間中良かった事だ。 ど、それはそれ。

「志賀高原行き」 の方は何年か後の事なのに、 ほ



志賀高原の池にて。左より卓也、修一(長男)、靖。

する日。 情。今こそ家長の責任を全うする時だといった精悍な ソク、 顔つきで、 とした表情のこと。それが見られたのは、台風が来襲 懐中電灯の用意などを命じる時の嬉しそうな表 父が家族の者たちに、雨戸の釘打ちや、 口

を「父の休息」と呼びたくないが、 をかけ回っていた姿が思い起される。まさかこんな時 待に反して大した事はなかったけれど。 などと言いながら、あのさして広くはない森前町の家 医がいるのも確かなことである。まあ、台風は父の期 「修一、座敷は締っているか、 停電の用意は出来ているか」 もう一度見て来い」 そう思ってしまう

に移って行くことになる。 の家へと移り、そしてやがて大家として世田谷の屋敷 したことであろう。そして新進気鋭の流行作家の立 父は一体、 あの八年間の日々に何作の小説や詩をモ 大井町の中の二番目の棲家、滝王子

この頃のことを父に尋ねたことがある。 「お父さん、 大井町の頃は凄かったね」

> 出すのは、 ら解放され、自分の家族を引き連れて りかけていて、 面目躍如といった感じであったろう。 休息だったに違いない。原稿から解放され、 くれなかったせいかも知れない。 んど記憶がない。 でも、父にはこれらの家族旅行は、とても素晴しい これは休息とは関係ないが、 「日光行き」ほど、 もしかしたら、 父はすでに大家にな 僕の父親ではいて もうひとつ思い

父の生き生き

**、闘う家長、の** 

寝不足か

何が凄かったのかは、そこは父子、お互いに分かる。 今思うと、 まあ、 あれはあれで楽しかった」 しかし人間にはああいう時が必要だ

葉である。 こういう質問に対して父がいつも答える、 定番の言

家跡を指すのではないかと。 あの、父が闘う家長を全うせんと奮闘した、 あるとすれば、それは意外や世田谷の屋敷跡ではなく、 中の下町、工場に囲まれた庶民の街、 今、僕が思うに、井上家にもし「聖地」と呼ぶ地が 大井森前町の棲 山の手の



志賀高原の池にて。佳子(次女)と卓也。

#### () くよ 平成二十三年度

上靖および井上家に関する行事につい て報告いたします。 平成二十三年度に私が関わった父井

えました。 障の手術での入院、そして金婚式を迎 手術での入院、本年早々には私の白内 回もの突発性難聴での入院、娘朋子の 学試験、大学受験と人並みに心配した 孫たちの出産や七五三、小中学校の入 録には書いていませんが浦城家五人の り、喜んだり、また主人の胃がんや二 年間の忙しい生活を思い返すと、 ら本年度で十回目を迎えます。 「私の備忘録より」を書き始めてか この十 備忘

六月に妹とオーストラリアのシドニー ました。平成二十四年に入ってからも 中国へと備忘録に記した旅行をいたし アへ井上靖賞の授賞とイベントの仕事 人とスペインへ十三日間の旅行を楽し へ賞とイベントの仕事で、十月には主 平成二十三年四月にはオーストラリ 九月にはモンゴルへ、十一月には

は申します。 れました。現在はまた忙しい日常に戻 で爽やかな風と共に穏やかな日々が流 孫たちと過ごすのもうれしく、 備忘録の下書きも書きました。子供や 訪ねてくれたり、姪たちからバーベキ 普段落ちついて出来ないでいる仕事を せというものかも知れないよ」と主人 りましたが、「もしかしたらこれが幸 ユーに呼ばれたり、 したり、知人や友人夫妻が泊りがけで ヶ月余りを軽井沢の家で過ごしました。 作りを楽しみ、夏には暑さを避けて一 あわただしい日々の中にも庭で野菜 呼んだりと、この 緑の中

#### 平成二十三年

#### 四月二日

井上靖賞とイベントの打ち合わせをす り電話がある。十五日のシドニーでの オーストラリア在住の大谷正矩さんよ 旭川市の荒川美智さんより電話が

する。 あり、 四日の来宅の件の打ち合わ せ

#### 四月四日

宅へ。書斎移転及び寄贈資料について 当課長荒川美智氏、文化振興課長山崎 著作本の箱詰めなど一日がかりであっ の打ち合わせ。美術品の撮影や一部の 文化振興課主任稲垣啓氏の六名が井上 則明氏、井上靖記念館主任沼田聡氏、 教育部長河合伸子氏、井上靖記念館担 旭川市の副市長表憲章氏、社会

四月五日

私も井上宅へ出掛ける。 本などを取りに井上宅に来られるので、 学芸員と篠崎啓史氏が文学館に必要な 上靖文学館の松本亮三館長、徳山加陽 静岡県長泉町クレマチスの丘にある井

父の著書、写真、パネルなど必要なもられている。井上家を壊すにあたり、 写真やパネルや肖像画などいろいろ差 本年早々に連絡をした。著書のほかに のがあれば取りに来ていただきたいと 図書館の中には井上靖のコーナーも作 山荘の父の書斎を模したものがあり、碑もある。文化センター内には軽井沢 南町には無人の記念館「野分の館」や 宅に来られるので、私も井上宅へ。 長と企画課室長の田邊陽子さんが井上 し上げた。 疎開の地、鳥取県日南町より増原聡町 H

### 四月十三日~二十一日

で今回のイベント 大塚清吾氏の「井 大学へ。フィッシャー・ライブラリー 十四日、朝シドニー着。 吾氏、篠崎啓史氏、恒雄、 上靖とシルクロード・敦煌」写真展の ストラリアのシドニーへ。大塚清 午後シドニー いくよ。

> して打ち合わせ。 先生マッツ・カールソン氏に原稿を渡 ピーチの通訳をして下さる日本学科の お会いし、展示を拝見。続いて私のス 展示を担当して下さった西村美香氏と

十六時、日本総領事館を訪ね、小原雅 ジョン氏を表敬訪問。 十四時、外国学部長のダンカン・イビ

博総領事、

相原良江領事にご挨拶。

ロンゴン大学)、受賞論文は"Reading 図書館)へ。会場の最終点検に行った。 若雄次長を訪ね、ご挨拶。小池次長に 十五日、 代日本のアニメ、 Lolita in Japan"で日本の少女漫画と現 受賞者はヴェラ・マッキー教授(ウー 十八時半、第五回井上靖賞の授与式。 ャー・ライブラリー(南半球で最大の っている。夕刻シドニー はこの賞が始まった時からお世話にな ンデーションの清田とき子所長、小池 十一時半、ジャパン・ファウ 少女たちの社会現象 大学フィッシ



シドニー大学フィッシャー・ライブラリーにて。 左より浦城恒雄、いくよと、大谷百江、大塚清吾、大 谷正矩の各氏。後ろは大塚氏の写真。

シドニー大 シドニー大

若雄次長、シドニー大学のマッツ・カ

小池

見える大きな部屋でゆったりとした楽

ルソン夫妻などが参加された。海の

しい会であった。

学日本学科長のオリバー・アンサー 私がご挨拶と、「父井上靖のシルクロ 煌における井上靖の思い出」、最後に 清吾氏による講演「シルクロード・敦 領事の挨拶の後、受賞者の講演、大塚 学マイケル・ルイス教授、小原雅博総 教授による受賞者の発表、 を取り上げた論文である。

十六日、 パン・ファウンデーション所長、 夫妻、相原良江領事、清田とき子ジャ 第三回受賞者のイアン・マッカーサー れた。受賞者のベラ・マッキー なった方々を招いたパ そのあと参加者みんなで写真展を見た いて」と題して話をした。 十二時半、今回のイベントでお世話に ード・敦煌への想いと大塚清吾氏につ

ティ

夫妻、 が開か

①シルクロードにおけるソグド交易商 セミナー」が開催された。 ニー大学外国学部で「シルクロード・ 十九日、十四時~ 人たち(哲学・歴史学部フィオーナ・ 十七時十五分、 シド

キッド博士)

氏 史(考古学部アリソン・ベッツ教授) ④井上靖と敦煌(写真家・大塚清吾 ピーター・アームストロング博士) ③仏教建築とシルクロード(建築学部 ② Path から Road く シルクロード前

従弟の大谷正矩宅でパーティ

四人の方が講演をされ、 セミナーであった。 大変興味深

をスライドを交えて話された。ワイン 世絵)から強く影響を受けたという話 の印象派の画家たちと同じく、日本の トプラー氏)と日豪写真愛好家の交流 氏とオーストラリアのハートムー 街にある「ユガ・カフェ・ギャラリ を飲みながらの楽しい会であった。 十七世紀~二十世紀の木版画(特に浮 と親睦会が開かれた。大塚さんは欧州 夕刻十八時半~二十一時、大学に近 」で二人の写真家(日本の大塚清吾

#### 四月二十六日

時から。修一、甫壬、卓也、佳子、 をいただいた。松竹本社の試写室で十 雄、いくよ。 「わが母の記」の完成試写会のご案内 恒

この冬は大変な騒ぎだった。この家で 震が起こった。 けをしていた三月十一日に東日本大地 の撮影も終わり、関係者が最後の片づ 世田谷の井上の家がロケセットとなり

子さんより連絡があったと、修一より 在もそのまま使用している。 のキャプションを書いていただき、 た。旭川の記念館ができた時には展示 念文化財団の評議員もして下さってい 川市の井上靖記念館相談役や井上靖記 られていた。父を中心とした山のグル お勤めの頃は井上へ原稿取りによく来 高野昭氏が亡くなられた。読売新聞に カエル会の会員でもあった。旭 突然の死去だったそう 山本安見 現

> らい で、親 八十四歳。ご冥福を祈る。 しくして下さっていただけ に淋

#### 五月十二日

来宅。 淳起氏と主任の近藤由香利氏が井上に 午後から書籍や美術品を運送するため 十時に旭川市井上靖記念館の館長齊藤 の運輸業者四社が入札のための下見に 旭川に送るものを整理するため

#### 五月二十二日

てそれぞれ電話をかける。 と決めた。ご招待する方々に手分けし ましょうということになり、六月七日 い方々をご招待して家のお別れ会をし 前中、よく家に来て下さっていた親し 井上家を解体するにあたり、 父母の生

#### 五月二十八日

井美佐子さんに遺品の件で電話する。 井上靖文学館の松本館長に頼まれ、 向

> ダーや、 も』という父に関する本もお書きにな 時々頂戴した。『井上靖さんのことど 作られた。私も素敵な楽しい絵手紙を 海」をテーマにしたラベルやはがきも 絵が上手で靖の作品から色んな絵を描 っている。 かれ、作品の題名や絵を入れたカレン 父上の向井覺氏は父の四高の後輩で、 あとは館長さんにお任せする。 四高時代を書いた作品「北の

#### 六月二日

る。 れる。写真をデジタル化するためであ で井上宅に沢山の写真帳を取りに来ら 六氏が松本館長、篠崎さんと一緒に車 父の故郷湯ヶ島の写真屋さん川 田五十

る。私は「ちらしずし」を作ることに 準備と打ち合わせをする。 午後からは応接間で七日のお別れ会の なった。 いくよがそれぞれ何かを作って持参す 甫壬、佳子、

「生誕一二〇年河井寛次郎展」(平成二十三年十二年十二月二十七日~平成二十三年一月十七日、日本橋高島屋)に出品した、いつも応接間に飾ってあった大きた、いつも応接間に飾ってあった大きた、いつも応接間に飾ってあった大きた、いつも応接間に飾ってあった大きた、いつも応接間に飾ってる。河井な壺、郎の鷺珠江さんと主催の毎日新聞社の場所を業者の方が返しに来られた。

を、鷺さんにお願いする。 井寛次郎氏の箱のない作品への箱書き子供たちそれぞれが父からもらった河

ら次々と来客の多い日であった。 は久しぶりに会ってとても懐かしい。 は久しぶりに会ってとても懐かしい。 けない頃はよく来ていた。今日は朝かいさい頃はよく来ていた。今日は朝かいさい頃はよく来でいた。今日は朝か

#### 六月五日

湯ヶ島の写真屋さんの川田五十六氏宅

ここは自然に集まって来る。カジカが 真の量は膨大で、大変な仕事である。 准教授)がコメンテーターとしておら 庸介アナウンサーと比留間亮司アナウ 流すというので取材に来ている。 古いアルバムの写真をデジタル化する を放している所が沢山あると聞くが、 どろいた。最近は人工繁殖させたもの は初めて見たが、大きく明るいのでお ほとりを案内して下さる。源氏ボタル 木基文氏が源氏ボタルの沢山いる川の スをいただく。帰路船原館のご主人鈴 夕食はみんなで船原館でわさび鍋コー 加陽さんも手伝いに来られている。写 れた。井上靖文学館の松本館長、 ンサーに加え、勝呂泰氏(桜美林大学 のテレビのニュースがスポットとして いるということを、NHK静岡放送局 ことに故郷の写真屋さんが取り組んで 土間に段ボールに入れて積んである。 井上から持ってきたアル バムが玄関の 徳山 中山

> も弱々しいそうだ。 平家ボタルは ずっと小さく、明るさ鳴いていて素晴らしい。それにくらべ

故郷の小川の岸辺明るむ何百の源氏ボタルが飛び交いて

#### 六月七日

男の歌」も思い出の一つとなった。 四十名の方々に来ていただいた。いよ 加井名の方々に来ていただいた。いよ から父母のところへよく来て下さって いた親しい方々をお招きした。カエル 会の方たちや懐かしい方々が来て下さ る。加藤九祚さんが歌われた「カンペ

族の遠き思い出しのぶ 父母の愛で品々旭川に贈るとき

#### 六月八日

旭川市の西川将人市長、表憲章副市長、

一、甫壬、恒雄、いくよ参加。

一、甫壬、恒雄、いくよ参加。

一、甫壬、恒雄、いくよ参加。

#### 八月十一日

井上一族の家のお別れ会。父母の生前も、亡くなってからも子供、孫、ひ孫も、亡くなってからも子供、孫、ひ孫も折に触れては集まって食事をしていた居間や応接間との、今日こそ本当のた居間や応接間との、今日こそ本当のた居間や応接することが出来るのだろうが。父母が大好きでよくみんなにご馳か。父母が大好きでよくみんなにご馳走してくれたうなぎ屋に注文して一族で賑やかにいただく。

今は静かに移築待ちをり 父母在りし日々来客に賑わいし応接間

#### 六月十三日

来られるので一応点検しに行く。市から美術品や書籍全部の運び出しに市から美術品や書籍全部の運び出しに

#### 六月十四日

る。十六日までかかる。 はいよ書籍および美術品の運搬が始ま がは、いま書籍および美術品の運搬が始ま

#### 六月十五日

テル別館二階、十六時半~十八時。井上靖記念文化財団理事会、山ノ上ホ

#### \* 議題

報告、その他二十二年度収支二十二年度事業報告、二十二年度収支

終了後同室にて日本料理の懇親会。

#### 六月十六日

ご苦労様のご挨拶をしに行く。 井上へ。書籍および美術品の運び出し

#### 六月十九日

席。 十六時半より。修一、甫壬、いくよ出十六時半より。修一、甫壬、いくよ館、高野昭氏をしのぶ会、国際文化会館、

四月二十六日に急逝された高野氏をしのぶ会が生前お世話になったり、親しくしていただいた方々で奥様を囲んでくしていただいた方々で奥様を囲んでけるされた奥様はさぞかしお淋しいことでしょう。「僕は先生の亡くなられた年より長生きしていますよ」と最近なく言われていた。

#### 月二十一口

レマチスの丘の井上靖文学館へ。私がより、向井美佐子さんをお連れしてク篠崎啓史氏の車で松本館長のお招きに

が何千と咲き、それが満開できれいだ 描いたりされたものは文学館に差し上 美味しかった。 った。ご馳走になったしゃぶしゃぶも ヴァンジ彫刻美術館の庭のクレマチス げた。松本館長が招いてくださった。 持っているもので向井覺氏が作ったり、

#### 七月十四日

前までに家の中にくっついている本棚 度は解体業者(八名)を連れて来宅。 午後から井上へ。十四時、旭川市 でに解体・運搬の予定とか。 や電気類などを旭川に運ぶ。 からいよいよ家の解体を始める。お盆 今後の予定の報告を受ける。八月二日 崎則明文化振興課長が移築のために今 八月末ま 0 Щ

#### 七月十五日

猛暑の中、 も父の本を差し上げたいと思い、 を訪ねる。米子にある井上靖記念館に 講道学舎の中山美恵子さん

> 会いしたことなど報告する。 をしたこと、そして井上でご夫妻にお ニッカ株式会社の横地将男社長に電話

#### 七月二十日

わけか一日中雨は降っているが風は静大型台風が近づいていたが、どういう

単行本を雨の中持てるだけ差し上げる りのお土産に母ふみのエッセーや靖の おられるようだ。感じの良い女性で帰 は初期の恋愛小説までも殆んど読んで 経大学の先生をされている。父の小説 れ、博士号を取得され、北京の中央財 井上靖をテーマにして学位論文を書か 山南俊雄氏も一緒に。廬さんは中国で 家に来宅。廬さんを紹介して下さった 北京より廬茂君さんがつくし野の我が

### 七月二十三日~二十四日

井上靖研究会、 十四時半より。 伊豆市天城湯ヶ島支所、

もとに―(尚絅学院大学教授・田村嘉 井上靖と川端康成― 「しろばんば」を

#### \*講演

講師・秋吉好) 三井寺本覺坊暹好の実像 (元奈良大学

と時を過ごした。翌日は天気も良く、 池豊氏はじめ「井上靖ふるさと会」の 使っていた温泉旅館。旭川や鹿児島を 熊野山のお墓へも皆でお参りして下さ 方々も夕食会にも参加され、楽しいひ はじめ全国から参加された。市長の菊 れる。宿泊の白壁荘は父が常宿として 本年の研究会は父の郷里湯ヶ島で行

#### 北京より来宅女性は研究者 博士論文「靖」で取得

#### 八月二十五日

学での井上靖賞とその関係イベントの 桃山荘」へ資料を持って来て静かなと 五年間分の整理を軽井沢の我が家「胡 気になっていながらいつまでも出来な ころでやっと出来上り、 いでいたオーストラリアのシドニー大 ほっとした。

市から業者代表の方が来宅され、 記念館横への移築作業が終了し、 ているのでこちらで壊すことになった。 て行かれた。まだ外側のまわりは残っ が外側に入っていて、 は無くなったが、応接間と書庫は鉄骨 と私が確認の署名と押印をした。書斎 井上へ。書斎と応接間の旭川市井上靖 内側だけを持っ 旭川 修一

米子にあるアジア博物館井上靖記念館 を書いて投函する。 の友の会の会報『海鳴り』に近況報告

話になっていた)の方に、母が晩年使 外してもらい、 に井上家を新築した時からずっとお世 お願いしてある南建設(五十年以上前 の解体工事の様子を見に行く。 書斎と応接間の移築後の、外側の残り んでもらう。 していた手すり つくし野の我が家へ運 や居間の電燈などを 工事を

### 九月二十六日~十月一日

モンゴル旅行。

単行本十一冊、文庫本十九冊)を寄贈 し、「日本文化文学オーパス文庫」が さんの亡夫 (詩人) ユーホーブックス)社長の難波多津子 オルホン大学に、知人の有朋書院 でモンゴル国ウランバートル市にある 元駐モンゴル大使花田麿公氏のお世話 設立された。 団より井上靖の著作物(全集二十九冊 百冊の図書に加え、井上靖記念文化財 寄贈式に花田麿公氏や難 の残した約七千六 現

> した。 波さんや知人たちと、恒雄と私が参加

式典が開かれ、 てモンゴル国外務省会議場で「モンゴ 波さんと私が挨拶をした。 れた。シンポジウムの途中で図書寄贈 文化受容国際シンポジウム」が開催さ ル日本戦略的パートナーシップ オルホン大学学長と難 パス文庫設立を記念し 革



オルホン大学図書館にて。左より浦城いくよ、 難波多津子さん。

暢な日本語で子供たちから質問が出さ 自分の創作童話を話されたところ、 教育を行っている小学校を訪ね、同行 て日本語科の学生たちにより歓迎イベニ十八日、オルホン大学図書館におい れたのには驚いた。 その後、市内にある日本語ですべての ントが開かれ、続いてオーパス文庫オ した作家の志茂田景樹氏が通訳なしで - プニング式典が開かれた。

遠々とモンゴル草原バス走る ゲルにもくもく煙立ちをり

#### 十月十一日

より。恒雄と出席。 式、六本木アカデミーヒルズ、十七時 国際交流基金賞、シンポジウムと授賞

\*記念シンポジウム

ベルク、伊東豊雄、北川フラム 「日本的風土の再構築」オギュスタン・

> ①文化芸術交流部門 タンブッコパーカッション・

アンサン

入れ、世界各国の人々に日本の現代音 リーに日本人作曲家の作品を多く取り メキシコの打楽器グループ。レパート (メキシコ)

②日本語部門

楽を紹介している。

(エジプト) カイロ大学文学部日本語日本文学科

③日本研究知的交流部門 行っている。 本語の普及、日本文化研究者の育成を 本語・日本研究機関。永年にわたり日 中東アフリカ地域で最初に発足した日

が、それぞれ永年日本に関するいろい 毎年受賞者のスピーチを拝聴している オギュスタン・ベルク(フランス) ろな事をされていて感動することばか 日仏会館の館長も務めた。 フランスにおける日本研究の第一人者

#### 十月十七日

『伝書鳩』の原稿を一応書き上げ、 ルで送る。 メ

#### 十月十八日

終了後、日中文化交流協会の事務局の 版代表団が五十五周年を慶祝して来日 子さんたち四人の同行メンバーと来月 純子・佐藤祥子・木村美智子・鈴木洋 戸室道子さん、竹本リサさんと、佐藤 中国人民対外友好協会代表団と中国出 甫壬、恒雄、いくよ出席。 タニ「鳳凰の間」、十四時より。 記念レセプション、 日本中国文化交流協会創立五十五周年 ホテルニューオ 修一、

館ゴールドルーム、十八時~十九時半。 文学賞授賞式とレセプション、 午後からの日中の会につづいて夜の会 小西国際交流財団、 第十 六回日仏翻訳 東京会

の唐家璇氏の招待旅行の打ち合わせを

四人で出席。 で、場所も近くとても良かった。 同じ

\*受賞者

を翻訳された鈴木雅生氏 ル・クレジオ「地上の見知らぬ少年」

\*特別賞

清水徹氏

#### 十月十九日

や賞のことなど話しあう。 の大忙し。井上家移築以後の館の運営 せ。表さんは東京出張の合間をぬって ホテルニュー 旭川市の表憲章副市長と打ち合わ オータニ、十六時~十七

#### 十月二十二日

秀彦さんの招集で集合。修一、 新財団の説明、 いくよ、 黒田宅、 大谷光敏。 十九時より。 卓也、

### 十月二十五日~二十七日

旭川市井上靖記念館行。

い。のために集まって下さり、大変うれし 事の方たち五名と居酒屋で、 先生が着任されており、初めてお会い られた中西睿先生に代わって平野武弘 ど寒くはない。展示などを担当してこ 二十五日、旭川は小雨だが、思 てあった。夕食はナナカマドの会の理 でおられた。西域小説関連の展示がし する。自分にとって最高の職場と喜ん いつも私 ったほ

がかけられていて外からは見えない。現場を案内し、説明して下さる。覆い にかかわっておられた方。 かっている。山崎氏は移築の設計など 中はこれからだが外観は殆んど出来か さんとホテルに迎えに来られ、移築の 二十六日朝、 山崎則明課長が館の近藤

いただき、生徒に話をしてもううことに来てもらい、井上靖をもっと知って 生はこれから高校の先生たちに記念館 記念館で平野先生とお話しをする。先

> けをしたいと言われた。大変大事なこ が大事で、自分はこれからその働きか

長、河合部長、荒川課長、齊藤館長に 夕方小池語朗教育長の部屋で、 お目にかかる。 表副市

ことで波及効果が出てくると思うとの 先生に読んでもらい底辺を広げていく 賞は中高生を対象にして、市の沢山の ませる運動が出てきている時代になっ いけばよいのではないかと言われた。 を読む運動の中に井上靖を取り上げて てきたので、市が行う読書感想文や本 小池教育長は、 小学生に本をもっと読

言っている」と喜んで電話してこられ 話がくる。「先日いただいた本や今ま ねることになっているのでその時にし た。十一月に北京の中央財経大学を訪 私の上司の先生たちがやりましょうと で浦城さんから頂戴した本の贈呈式を 夜、ホテルへ北京の廬茂君さんから電

#### 十一月四日

徒に話をして下さい」と言われる。 「来週中央財経大学に来られた時に生 北京の廬茂君さんから電話があり、

『伝書鳩』校正して投函する。

#### 十一月七日~ 十五日

中国旅行。

南京、 智子・鈴木洋子さんたちと北京、大連、 大連、南京は初めて。 れていた佐藤純子・佐藤祥子・木村美 夫婦そして日中文化交流協会に勤務さ 顧問のご招待により、修一夫妻と私共 世話になった唐家璇中日友好協会名誉 父が生前、 揚州、上海への旅をした。私は 中国訪問の折にたびたびお

北京では唐家璇氏に中南海でお会いし、 父が生前書いてあった色紙を差し上げ

> ちに井上靖について話をした。 私は先日お願いされていたので学生た を日本学科の学生たちが行って下さり、 に差し上げていた井上靖の本の贈呈式 その日の午後は廬茂君さんの招きで主 大連では旅順の二〇三高地へ登り、 人と中央財経大学を訪問。私が今まで か

ご馳走を色々頂いた。現在の日中関係 物の中華料理も日本とは違った種類の とはこの旅の大きな収穫であった。 巴金先生のアルバムを頂戴したり、 を思うとこの旅が昨秋で本当に良かっ 各地で歓迎の宴を催していただき、好 ろいろと二人のことを伺ったりしたこ 令嬢季小林女士にお目にかかり、父と では父と親交のあった作家巴金先生の うな広さなのにはびっくりした。上海 日本の羽田空港のビルと変わらないよ た。出来たばかりの上海の新幹線駅が 南京から上海へは初めて新幹線にのっ つての激戦の跡をしのんだ。 11

た。

ロシアとの激 柏葉踏みつつ二〇三高地登る しい戦に思いはせ

#### 十一月十六日

いくよ。 器株式会社を訪問する。 ただいている小西龍作氏に財団からの あるお願いをする件で、 井上靖記念文化財団の評議員をして 大阪の日本臓 佳子、

#### 十二月四日

パス二号館、十四時より 井上靖研究会、國學院大學渋谷キャン

\*研究発表

「井上靖と川端康成」尚絧学院大学

田村嘉勝

\*講演

「無量の寂寥と井上靖」中津攸子

\*懇親会

時より。 中野にある難波多津子さん宅へ、十八 恒雄と出席。

が自作の料理持参の楽しい夕べ。 旅行以来初めてお会いする。それぞれ 心にモンゴルへ行った方々との忘年会。 九月にオルホン大学への本の贈呈を中

#### 平成二十四年

#### 一月二十日

藤淳起館長、荒川美智課長、清水節男 談役会、クラブ関東、十二時より。齊 平成二十三年度旭川市井上靖記念館相 いくよ出席。

業実施状況、二十四年度の事業計画な 二十二年度の事業報告、二十三年度事 雪が舞っているとても寒い日。メンバ -だった高野昭氏が亡くなって寂しい。

公開のこと。 応接間オープンに向けての式典や一般 父の誕生日にあたる五月六日の書斎・

> 対象とする。靖が書いた沢山のエッセ 称)のことが中心で、中学・高校生を らうのは如何なものか考える。 た題でそれぞれにエッセイを書いても のエッセイ賞の特徴とする。提示され イの題名の中から題を選び、これをこ 議論は主として井上靖記念館賞(仮

#### 一月二十一日

佳子、卓也、いくよ。 宅、十三時より。修一、甫壬、秀彦、 いないので秀彦さんより説明あり。新財団について皆まだよく理解できて 井上靖記念文化財団打ち合わせ、 修一

### 一月二十三日~二十八日

が仕方がない。 毎年湯ヶ島で催される「あすなろ忌」 者医療センターに入院。 いくよ、白内障手術、順天堂大学高齢

#### 二月十三日

を沢山いただく。 採ったという松本家のおいしいみかん 連載、堂本印象挿絵、千葉亀雄賞受 初期の小説「流転」(『サンデー毎日』 修一宅へ行った帰路来宅される。父の 徳山加陽学芸員が篠崎啓史氏の運転で ものを見に来られる。昨日みかん畑で て若い頃額に入れて書斎に飾っていた 長泉町井上靖文学館の松本亮三館長と の第一回目の挿絵で父が大切にし 終日暖かな日。

#### 二月二十日

新財団への移行の説明が事務局長の黒 テル、十六時~ 田秀彦よりある。 井上靖記念文化財団理事会、 十七時半。 終了後同室で中華料 山 「ノ上ホ

理の懇親会。

平成二十四年度事業計画 一般財団法人の定款について (案)

平成二十四年度収支予算 (案)

助成規定について(案)

役職員の旅費報酬規程(案)

#### 二月二十二日

町田市在住の創価学会の方三名来宅。潮出版が出している雑誌『パンプキン』にインタビューをお願いしたいとか。母が生前お世話になった出版社で、『パンプキン』には連載もさせてもらっていたのでお礼のつもりで引き受ける。

#### 三月五日

先日頼まれた『パンプキン』の編集部の方二名とカメラマンとフリーライターの計四名の方々がインタビューと取材に来宅された。母ふみの生き方、私材に来宅された。母ふみの生き方、私材に来宅された。母ぶみの生き方、私

#### 三月七日

談に来られる。 談に来られる。 談に来られる。 談に来られる。 談に来られる。 談に来られる。 談に来られる。 談に表会いして話が弾むた方。 へしぶりにお会いして話が弾むた方。 へしぶりにお会いして話が弾むた方。 へしぶりにお会いして話が弾むた方。 のこと、これからの運営など仕事の相 がに来られる。

#### 三月八日

中原稿書き。『海鳴り』の締め切り日が近く、一日

#### 三月十日

実印を持って集まり、署名捺印。秀彦、いくよ出席。宅、十四時より。修一、甫壬、卓也、宅、十四時より。修一、甫壬、卓也、

『海鳴り』原稿投函する。

#### 三月十九日

時四十五分より。「わが母の記」完成披露試写会(マス「わが母の記」完成披露試写会(マス

子の役所広司、樹木希林、宮崎あおい、の役所広司、樹木希林、宮崎あおい、上映前に舞台挨拶が行われた。出演者

細かい映像がよく見えた。かった。二回目は筋もよく理解でき、らない事が多く筋までもがピンと来ならない事が多く筋までもがピンと来ないない事が多くがないまない。というにかけるに、どうにかけののでは、というに

### 三月二十三日~二十五日

る。日南は小説「通夜の客」の舞台と 息子義明夫婦と孫の采佳、尚生を連れ 息子義明夫婦と孫の采佳、尚生を連れ にと、文化センターの中に軽井沢の 館」と、文化センターの中に軽井沢の がある父の書斎を模した部屋があ

# の良い所である。なった中国山脈の尾根にある大変風景

念館を見学に出かけた。
一次ので、春休みを利用して祖父の記子も日南も一度も行ったことがないと的」という施設がある。義明一家は米館」という施設がある。

日南町では増原聡町長、内田格教育長、日南町では増原聡町長、伊田美和子野分の会会長が私どもの泊まった町営の「ふるさと日南邑ファームイン」へ訪ねてこられる。先日贈呈した品その他についられる。

でこの日も雨でがっかりだった。でこの日も雨でがっかりだった。ないただき、疎開の家の跡地や野分の館いただき、疎開の家の跡地や野分の館いただき、疎開の家の跡地や野分の館いただき、疎開の家の跡地や野分の館

無情の雨の強く降りくる疎開地に子孫連れての春旅行

#### 三月三十一日

思いまで起こってきたが、方向が決して書くことにした。 世別者で起こってきたが、方向が決して書くことにした。 世別者で起こってきたが、方向が決して書くことにした。 世別者で起こってきたが、方向が決して書くことにした。 世別者で起こってきたが、方向が決して書くことにした。 世別者で起こってきたが、方向が決して書いまで起こってきたが、方向が決しているが決している。 世別者で起こってきたが、方向が決していて書くことにした。



### 事業報告

# 井上修一(井上靖記念文化財団理事長)

42

平成二十三年度の本財団の主な事業をご報告いたし

### (一) 井上靖を記念する文化賞

体を顕彰する「井上靖文化賞」は、平成十九年度に十 するため、関係機関と協議中です。 二十四年度に移行する一般財団法人のもとで継続実施 五回を一区切りとして、諸般の事情により中断。平成 文学、美術、歴史等の分野において貢献した人 · 団

# (二) 海外における日本文化の研究助成

リアにおける日本文学の研究奨励のために、設立資金 「井上靖(奨励金)賞」は平成十八年にオーストラ

> in Japan")に差し上げることになり、平成二十三年四 ラ・マッキー(Vera Mackie)教授(論文 "Reading Lolita その第五回になりますが、ウーロンゴン大学のヴェ ラリーにて授与式が行われました。 財団等の共催で、シドニー大学フィッシャー・ライブ 月十五日、シドニー大学と国際交流基金シドニー、本 励金)賞選考委員会にお願いしてあります。今年度は 奨励金授与対象者の選考はシドニー大学の井上靖(奨 五十万円をシドニー大学に寄付し、創設したものです。

が現地を訪問、 の可否について関係機関との協議を行うため浦城理事 さらに、モンゴルにおける日本文化の研究助成事業 打ち合わせを行いました。

井上靖文学の研究団体である「井上靖研究

会」の機関誌『井上靖研究』刊行のために助成を いた

# (三)井上靖に関する遺品・愛蔵品の保存・公開

蔵品を含めて旭川市に寄贈し、維持管理・保存公開を 靖の誕生日に一般公開されることになりました。 託しました。これらは平成二十四年の五月六日、井上 「井上靖記念館」隣接地に移築し、関連する遺品・愛 世田谷区にある井上靖邸の書斎と応接間を旭川市立

庫」にも全集二十九冊と単行本十一冊、文庫本十九冊 きましたが、前項(二)のモンゴル訪問にあわせ、 成二十三年九月二十七日、 靖全集」(全二十八巻 別巻一巻 新潮社)を寄贈して を寄贈しました。 オルホン大学に設立された「日本文化文学オーパス文 海外の主要大学、図書館など計五十七機関に「井上 ウランバートルにある私立 平

の「しろばんばの碑」の維持管理・保存公開を行いま また伊豆市湯ヶ島にある旧井上靖邸跡地及び跡地内 なお一般財団法人への移行後は当該土地を伊豆

> 二十二日付の「寄付受納承諾書」を伊豆市長より頂戴 市へ特定寄付として寄贈し、当事業を伊豆市に引き継 一日付で「寄付申出書」を伊豆市に提出し、同年七月 いでいただきます。それに向けて平成二十三年度六月 いたしました。

その他に次のような事業を行いました。

文化センター井上靖文学室」と展示資料寄託契約を結 びました。 平成二十三年四月一日、鳥取県日南町「日南町総合

との展示資料寄託一年契約を更新しました。 平成二十三年四月一日、旭川市立「井上靖記念館」

煌」を開催しました。 塚清吾氏による写真展「井上靖とシルクロード・敦 ドニー大学フィッシャー・ライブラリーにて写真家大 平成二十三年四月十二日から五月十二日、 のシドニー大学での奨励金授与式と並行してシ 前項

県長泉町「井上靖文学館」において、 平成二十三年四月二十一日から九月二十七日、静岡 伊豆市ならびに

「井上靖ふるさと会」、本財団等の後援で「育てる風土 伊豆ふるさと展」を開催いたしました。

第十一号が、本財団の協賛で発行されました。 平成二十三年六月一日、旭川市『井上靖記念館報』

物館」内「井上靖記念館」の友の会会誌『海鳴り』三 十号の発行に協力しました。 平成二十三年九月二十三日、鳥取県米子「アジア博

詞(ことば)と写真」に後援いたしました。 上靖文学館」において企画展「『氷壁』今よみがえる 平成二十四年一月六日から三月二十日、長泉町「井

# (四)日本近代文学に関する資料収集及び調査研究

文学館の資料収集を助成しました。 ルバム・書簡等の収集整理を行うとともに、日本近代 日本近代文学、殊に井上靖に関する蔵書・資料・ア

ている当財団機関誌『伝書鳩』第十二号を発行しまし また当財団の資料収集・調査研究結果などを掲載し

# (五) 井上靖に関する講演などの開催

シドニー大学のベッツ教授、フィオーナ博士、アーム ミナーが行われました。 にて大塚清吾氏による講演「井上靖とシルクロード」、 る写真展の他に、同大学のフットブリッジ・シアター (二) の奨励金授与式、前項(三) の大塚清吾氏によ ストロング博士によるシルクロードに関する講演、セ 平成二十三年四月十九日、シドニー大学での前項

好氏の講演「三井寺本覺坊暹好の実像」が行われまし 究発表会が伊豆市天城湯ヶ島支所で行われ、本財団か 靖と川端康成-らも参加いたしました。田村嘉勝氏の研究発表「井上 平成二十三年七月二十三日、井上靖研究会の夏季研 - 『しろばんば』をもとに」と、秋吉

発表会が國學院大學渋谷キャンパスにて行われ、本 表「井上靖と川端康成― 財団からも参加いたしました。田村嘉勝氏の研究発 平成二十三年十二月四日、 中津攸子氏の講演「無量の寂寥と井上靖」 - 『しろばんば』をもとに」 井上靖研究会の冬季研究

### が行われました。

た。伊豆市湯ヶ島の墓地にて墓参会を行い、引き続い 等の後援、井上靖ふるさと会等の協力で行われまし 追悼事業が、あすなろ忌実行委員会と伊豆市教育委員 子氏による「湯ヶ島朗読会」が行われました。 ル最優秀賞作品の発表と表彰が行われ、続いて平野啓 て「天城会館」にて、井上靖作品読書感想文コンクー 会の主催、 平成二十四年一月二十九日、「あすなろ忌」井上靖 伊豆市、井上靖文学館 (長泉町)、本財団

#### (六) その他

靖に関する次のような催しがありました。 本財団が直接協力したものではありませんが、 井上

### 旭川市立「井上靖記念館」

企画展「井上靖 戦国絵巻」展 平成二十三年四月十六日から七月二十四日、 口

企画展「井上靖 平成二十三年七月三十日から十月二十三日、 最晚年」展 第二回

> 平成二十三年十月二十九日から平成二十四年二月五 第三回企画展「井上靖 西域小説」展

企画展「井上靖 平成二十四年二月十一日から五月二十七日、 人と文学」展 第四 回

### ○北九州市立文学館

特別企画展「映画の中の日本文学―昭和篇― 材ノート』の展示 ばには本と映画があった」において井上靖の『穂高取 平成二十三年四月二十三日から六月十九日、 ーいつもそ 第九回

## ○大黒屋光太夫記念館(鈴鹿市)

回特別展「黒船がつれてきた漂流者 からジョセフ彦まで」 平成二十三年九月二十二日から十一月十三日、第七 大黒屋光太夫

### ○県立神奈川近代文学館

と万年筆」展 平成二十四年一月十四日から二月二十六日、「作家

# (七) 役員ならびに一般財団への移行経過

員は次の方々でした。 平成二十三年度の本財団の役員(理事、 監事)、評議

理事長 井上修一

常務理事 浦城幾世

井上卓也 相賀昌宏 岡野光喜 角川歴彦

黒井千次 佐藤隆信 三木啓史 三好 徹

山口 建

監事 水谷大介

評議員 伊藤 暁 井上甫壬 浦城義明 大越幸夫

大谷光敏 大波加弘 狩野伸洋 黒田佳子

小西龍作

佐藤純子

篠 弘 曾根博義

(五十音順)

導ご鞭撻をいただき、誠にありがとうございました。 りました。前記の役員・評議員の方々には長らくご指 十四年四月一日より一般財団法人に移行することにな 平成四年三月四日に設立された本財団法人は平成二

ここに記して深く感謝申し上げます。

平成二十四年四月一日、 平成二十四年三月二十一日付、 なお、 平成二十三年十一月二十八日、 団法人移行登記 移行認可の経緯は以下の通りです。 旧財団法人抹消及び一般財 移行認可 移行認可申請

平成二十四年四月十八日、 平成二十四年六月二十六日、 移行登記完了届提出 財団住所を目黒区より

横浜市へ移転登記

ます。 申し上げます。 の本財団役員 (理事、監事)、評議員は次の方々になり 一般財団法人に移行する平成二十四年四月一日から 末長くご支援ご指導のほど、 よろしくお願い

理事長 井上修一

専務理事 浦城幾世

理事 伊藤 暁 大越幸夫 狩野伸洋 佐藤吉之輔

一般財団法人 井上靖記念文化財団 変更になっています。

財団の住所は平成二十四年六月二十六日より以下に

氏にご就任いただきました。

なお、

新財団では事務局長ポストを設け、

黒田秀彦

評議員 監事

井上卓也

相賀昌宏

黒井千次

弘

三木啓史

三好

徹

山口 小西龍作

(五十音順)

大谷光敏 佐藤純子

曾根博義

〒二三五一〇〇〇三

横浜市青葉区新石川三-十八-九 黒田方

電話:〇四五-九一二-二二七二

メールアドレス:kurodah@inouezaidan.or.jp

編集後記

昨夏に第二子を授かり、悪阻のため編集作業が滞 『伝書鳩』十三号をお届けします。

てしまいました。連絡さえも途切れがちの編集に、温

かい励ましの言葉を下さった執筆者の方々に、心より

りますことをお詫びいたします。 御礼申し上げます。また、昨年より進めておりました **『伝書鳩』の財団ホームページへの掲載も、遅れてお** 

たしました。 今号は祖父の書斎と応接間の移築をテーマにしまし 十号から開始した祖父の未発表資料連載を、 休載い

た。旭川の井上靖記念館での移築記念式典に参加いた

しましたが、応接間に足を踏み入れた途端、目の前に

みました。関係者の方々の御厚意に、深く感謝いたし 世田谷にあったはずの風景がそのままに現れ、息を飲 西村承子

> 伝書鳩 第13号

行 西村承子・西村篤 二〇一三年三月十四日

編集者

発

株式会社 般財団法人 井上靖記念文化財団 シナノ

東京都世田谷区桜三-五-九

井上方

印刷所

発行所